

絶滅寸前から蘇った群生地。しかし、その将来は？

猿山のユキワリソウ群生地 (石川県輪島市門前町猿山)

猿山はかつて、ユキワリソウでは日本一の群生地があった。猿山は、能登半島の辺境の地にあり、道路や空港が整備されていなかった時代、舗装もされていない道路を、車で訪れるのは、至難であった。そのため、もともと猿山の斜面にはユキワリソウの大群生があつたが、誰の目もない事から、乱獲が進み、今から20年前には、絶滅寸前にまで個体数が激減していた。昭和43年(1968)年には、能登半島国定公園の特別保護地区に指定されてはいたが、乱獲は止まらなかった。特に、愛好者に好まれる赤花は、絶滅状態であった。あるのは疎らに白花が残っている程度。猿山の赤花は、桃色と紅花。紅花は花弁の中心部に白い斑が入る。

そこで、地元の有志が立上がり、行政にも働きかけ、猿山雪割草環境保全推進協議会を立ち上げ、雪割草の保全と育成に努める事となった。行政には、警察官によるパトロールの強化を要請、乱獲者の摘発に乗り出した。そして、猿山から種子を採集して、苗の育成、植栽事業を展開したのである。今では、灯台背後の最大群生地は、かつての姿を少しづつ戻しつつある。

のと里山道路の穴水インターを降り、皆月に向かうが、道路が複雑なため、カーナビに頼るのがベスト。皆月海岸から荒々しい海岸沿いを南下、猿山岬駐車場に着く。ここから徒歩で向かう。まずゲートがあり、シーズンならば300円の協力金を支払い、遊歩道に入

る。遠くに白い猿山灯台を木の間に望みながら、険しい断崖を削ってできた遊歩道を進む。春はまだ早く、少しばかりのキクザキイチゲが白い花を付けている程度。300m程で猿山灯台に着く。この脇を登ると、いよいよ雪割草の群生地である。

まず白花の大きな株が出迎えてくれる。種類はオオミスミソウで、ミスミソウより葉や花が大きい。葉の先端は鈍頭となる。さらに遊歩道を登ると、尾根沿いの斜面に赤花が混ざるようになる。遠く日本海から、猿山の稜線を望む展望と、足元の雪割草の群生は、実際にドラマチックな映像だ。ここまで道のりを思うと、感慨深いものがある。

朝日は猿山山頂付近から昇るので、この斜面では逆光になる。早朝8時に到着したが、まだ太陽は照っておらず、花は閉じたまま。太陽が照り始めると、花は一斉に開き始めた。そして、花弁に陽光が当たると透けて見え、実に美しい花の姿を見る事ができたのである。

筆者の地域のユキワリソウは、乱獲にもよるが、誰も知らない秘密の場所でも個体数を減らしている。温暖化の波が刻々と押寄せている実感がする。

猿山も例外ではなく、この先地元の人々の高齢化も考えられ、群生地の将来は楽観できないのが現実である。



猿山灯台・この背後の山斜面に群生地が広がる。

